

『直江兼続とその時代展』解説

越中の争乱

なおえかねつぐ 《直江兼続の登場と魚津城攻防戦》

直江兼続の登場する天正九年(1581)は、織田信長による天下統一が目前に迫っていた時期です。

当時、上杉謙信なき後の上杉氏は信長方の軍勢に攻めこまれ、越中西部の諸城が陥落していたほか、同盟関係にあった武田氏も天正三年の長篠の戦いで降参勢の一途をたどっており、非常な苦境におちっていました。

このような状況下で、上杉家当主景勝の側近として仕えていた樋口与六兼続は、急死した重臣直江信綱の養子となり、その名跡を継ぎました。のちの執政・直江兼続の登場です。

翌天正十年(1582)、信長の部将・柴田勝家率いる軍勢は越中の松倉・魚津両城に迫り、景勝は両城を支援するため天神山に布陣します。ところが、武田氏を滅ぼした森長可の軍勢が信濃口から本国越後へ侵入すると、景勝は松倉城の将兵とともに越後へ引きあげざるをえなくなり、越中の守りは吉江、中条らの魚津城将たちに託されました。

しかし、彼らの奮戦もむなしく魚津城は陥落してしまいます。城将たちは名を後世に残すため、耳に名札を付けて自害したといわれます。今回展示している城将から兼続へ宛てた書状に見られるように、魚津城攻防戦への対処は、表舞台に出た兼続の最初の正念場となったことは疑いなく、この場面は兼続を主人公とする小説にもしばしば登場しています。



直江与六殿
今月五日十一日付の書状見通、昨夜の刻に、
松倉城より届き、一日の御書御両通、昨夜の刻に、
地味津城より届き、一日の御書御両通、昨夜の刻に、
今問はず十日の御書御両通、昨夜の刻に、
たにわたり十日の御書御両通、昨夜の刻に、
決まりしに、十日の御書御両通、昨夜の刻に、
御披露し、十日の御書御両通、昨夜の刻に、
恐々謹言。

山本景長(花押)
吉江宗三(花押)
安部政右衛門(花押)
石口采女(花押)
若林九郎(花押)
亀田長三郎(花押)
藤丸小勝(花押)
藤丸泰重(花押)
藤丸泰助(花押)
寺嶋長六(花押)
吉江信三(花押)
竹俣慶四郎(花押)
中條景泰(花押)

魚津在城衆十二名連署状
《翻刻》
当月五日十一日之御書御両通、昨夜の刻に、
松倉に相違、此上之儀、各滅亡を申す、
申候、此由可然様御披露奉頼候、恐々謹言、
存定申候、此由可然様御披露奉頼候、恐々謹言、

うおづざいじょうしゅうじゅうにめいれんしよじょう
魚津在城衆十二名連署状 天正十年(1582)
おだのぶなが しばたかついえ うおづ
織田信長の部将・柴田勝家らの侵攻を受けた越中国・魚津城において、守りについてい
なかじょうかげやす なおえかねつぐ
た中条景泰ら12名の武将たちが、滅亡(陥落)を覚悟し直江兼続に宛てて送った書状。
この書状が出されたおよそひと月後の6月3日に魚津城は陥落し、武将たちは全員自害す
る。ところが、その前日の6月2日に本能寺の変が起きたことにより、上杉氏は当面の危機
から逃れることができた。
(山形大学附属図書館・中条家文書《重要文化財》)

ほんのうじ 本能寺の変と上杉氏

うおづ 魚津城陥落とはぼ時を同じくして本能寺の変が起こり、信長方の柴田勝家は軍勢を引きあげました。これにより上杉氏は危機を回避します。

ところで、本能寺の変に関しては、事前に明智光秀と周辺大名等との間に密約があったとする「謀略説」が取りざたされていますが、その際に証拠の一つとして採りあげられるのが、直江兼統の側近・河隅忠清が兼統に宛てたとされる書状です。

この書状の中で、忠清は須田満親のもとに明智光秀の使者が訪れ、合力をもとめてきたという旨を伝えています。しかし、この書状の原本が伝わっていないことや、2つ伝わる写本のうち古い方である『歴代古案』所収の文書に日付と宛先が欠けていることから、この書状は本能寺の変後のものあるという理解が一般的となっています。

また、石崎建治氏が『日本歴史』2005年6月号で紹介した天正十年六月九日（本能寺の変の7日後）付の奥州蘆名家宛ての景勝の書状には、羽柴秀吉が中国方面で討たれたということや、信長が津田信澄（信長の兄・信行の嫡子）に裏切られて切腹したという誤情報が述べられており、変の直後周辺諸大名は事態の把握に苦慮したことがわかるのみならず、いわゆる謀略はなかったことの裏付けともなっています。

会津・米沢移封時代

なおえじょう 直江状と関ヶ原の戦い

たいこうひでよし 太閤秀吉なき後、後事を託された徳川家康の振る舞いは専横をきわめ、義憤を共にした石田三成と直江兼統はあい謀って、上杉軍が会津に家康を誘い出し、その背後を三成が襲う密約を結んだ。その結果生じたのが関ヶ原の戦いである——火坂雅志『天地人』のほか、藤沢周平『密謀』、司馬遼太郎『関ヶ原』などでおなじみの筋書きです。

その根拠のひとつとされているのが、『直江状』と呼ばれる書状です。これは景勝の上洛をうながす家康への返答として、兼統が仲立ちをした豊光寺承兌に宛てた手紙です。しかし、この文書はその内容の過激さのほか、原本が伝わらずもともと古い筆写本である南部本が寛永十七年（1640）のものであることから、後世の偽作であることが疑われています。

吉江宗閻書状

《翻刻》

端書不申候、今度魚津之地御番被 仰付、依罷登、先達於増山之地御奉公申上付而、為隠居分被下候神保四郎左衛門尉分、猶以 御相違有間敷之由、重而御朱印被 成下候、目出度西表於逐本意者、彼地行分之内におめて五百俵之所可進之候、為後日一筆申達候 恐々謹言、

常陸入道 宗閻（花押）
拾壹月晦日 越前守殿 参御宿所

《現代語訳》

今度魚津の地の守備を仰せつけられましたので、罷り越します。先だって、増山の地においてご奉公したおり、隠居分として、神保四郎左衛門尉の領地を差し下されましたが、相違ないことの証として、重ねて御朱印状を頂戴いたしました。めでたく西表（越中戦線）において本意を遂げましたら、その領地のうち、五百俵分を進呈いたします。後日のため、一筆申し達します。恐々謹言。

よしえそうぎんしよじょう

吉江宗閻書状 天正九年（1581）

なかじょうかげやす 中条景泰の祖父に当たる吉江宗信（宗閻）が景泰に宛てた書状。越中方面（西表）で手柄をたてたら、今回隠居のための経費として得た所領の内から500俵分を分け与えるよう約束している。しかし、この約束は守られることなく、両名は魚津城において壮烈な戦死を遂げたのであった。

（山形大学附属図書館・中条家文書《重要文化財》）

上杉景勝朱印状

《翻刻》

知行之事、本領・新地共二、如亡父越前守代、不可有相違、者也、仍如件

天正十年 十二月二日 景勝
中条一黒殿（朱印）

《現代語訳》

知行のことは、本領・新地ともに亡父越前守（中条景泰）の代と相違ないものとする。よって件の如し

うえずぎかげかつしゆいんじょう

上杉景勝朱印状 複製 天正十年（1582）

うおづ 魚津城攻防戦において、若干25歳で戦死した中条景泰の遺児・一黒丸が所領を相続することを許した書状。

景泰は謙信に目をかけられ、吉江氏から名族中条氏に養子に入っていた。当時わずか5歳の一黒丸へ宛てたこの書状から、謙信・景勝の景泰への信頼の厚さをうかがえる。

（山形大学附属図書館・中条家文書《重要文化財》）

きむらとくえ

また、『直江兼続伝』の著者木村徳衛は以下のような状況証拠を挙げて、三成と兼続の密約はなかったと断定しています。

(1) 三成と兼続の親交をしめす文書は残っておらず、承兌ら文化人との交流の多かった兼続には不自然。(2) 上杉氏は会津に転封した直後であり、数年来作物の不作も続いており、領内は不安定で自ら戦争をしかける余裕はなかった。(3) 景勝は天正十二年(1584)頃の上條宜順宛ての書状に見られるように、兼続を厚く信頼しており、その兼続が上杉家を危機に陥れるような密約を結ぶことは考えにくい。

このように見ていくと、密約は小説やドラマの中だけのフィクションと理解しておくほかなさそうです。

直江状翻刻(部分) 江戸時代前期

一、景勝、当年三月者謙信追善相当候間、左様隙被明、夏中二八為御見廻上洛可被仕内存候故、人数武器以下、国覚仕置のため二候間、在國中二急度相調候様二と用意被申候処、増右・大刑少より使者被申越候分八、景勝逆心之沙汰穩便ならず候条、於無別心者上洛尤之由、内府様御内証之由候、逆無御等閑候ハ、讒人之申分有様二被仰越、急度御乱明候てこそ、御懇切之験たるへき処、無意趣逆心と申唱候条、無別心ハ上洛候へなと、乳呑子あいしらひ不及是非候。

《現代語訳》

景勝は、今年三月が亡き謙信の追善供養にあたる時期のため、このように間をおいてしまいました。夏中にはお見舞いのため上洛するつもりで、そのための人員と武器を整え、領内の仕置きについても(会津に)在國中に済ませられるようにと準備しておりましたところ、増右(増田長盛)・大刑少(大谷吉継)より使者がまいりまして、景勝が逆心したとの知らせがあり、穩便でないことであるので、別心がないのであれば、上洛せよとの内府様(徳川家康)の御内意であるとのことでした。とてもそうだった暇はありませんので、侮辱した人の言い分をよく聞かれて、急ぎご糾明されること、ご親切の証であるところでしょうが、根拠なく逆心と触れまわった上、別心がないのであれば上洛せよなどという乳飲み子のような扱いは、当否を考慮するまでもないことです。

うえずぎげごねんぶ

上杉家御年譜 24巻 米沢藩 翻刻 米沢温故会発行

けんしん

米沢藩上杉家の歴代藩主の事績を編年体で記録した藩の正史。藩祖謙信に始まり、幕末・維新期の十五代・茂憲までを編年体で叙述する。

やおいたさんいんのりあきら

編纂は儒者矢尾板三印伯章をはじめとする藩公用記録方の手になった。古文書を原文のまま引用し、公的記録のみでなく、武将間の書簡を多く利用していることは本書の史書としての信頼性を高めている。

(山形大学附属図書館所蔵)

れきだいこあん

歴代古案 5巻 編纂者不明 翻刻 『史料纂集』所収

しやてんもんじよ

わとじ

江戸時代に戦国期上杉氏の古文書を書写した写伝文書集。原本は20巻10冊の和綴本で、現在は上杉文書の一として、米沢市の市立上杉博物館が所蔵している。

うえずぎげごねんぶ

成立の事情は不明であるが、米沢藩の正史である『上杉家御年譜』とは採録文書があまり重複していないため、藩の修史事業との直接の関連は薄いと指摘もある。

(山形大学附属図書館所蔵)

えつさしりょう

たかはしよしひこ

越佐史料 6巻 高橋義彦編 大正十四年(1925)~昭和六年(1931)

よしだとうご だいにほんちめいじしよ

越後・佐渡両国の編年史料集。新潟県人高橋義彦が吉田東伍『大日本地名辞書』の史料かいしゅうへんさんかかり わたなべよすけ宛集に参加したのを機に東京帝国大学史料編纂掛の渡辺世祐博士らの助力を得て編纂した。

中世部分は、上杉氏関係史料を多く収める。刊本は天正十二年(1584)で終わっているが、未刊の稿本は明治まで作成されている。

(山形大学附属図書館所蔵)

えっちゅうしりょう

越中史料 5巻 富山県編 明治四十二年(1909)

だいにほんしりょう

太古より明治四十年に至る越中関係の史料を選択して、『大日本史料』の体裁にならって編年体で編纂したもの。六国史を初めとする正史的史書のみでなく、未刊の史料を多く引用する信頼できる史料集である。

上杉氏の本拠は越後国であるが、越中における軍事行動や分国支配の研究には欠かせない。

(山形大学附属図書館所蔵)



永禄六年癸亥四月十七日

繡

永浦尼

源末葉

壽昌寺住

中野内

出羽國最上

上法光院住増圓

もんじゅぼさつきしぞう

文殊菩薩騎獅像 複製 永禄六年（1563）

稚児姿の文殊菩薩が獅子に騎乗している姿を刺繡した掛け軸。「源末葉永浦尼

繡 永禄六年 癸亥四月十七日」の刺繡があり、最上義光の母永浦尼が1563年に刺繡し、寄進したものとわかる。当時上京していた義光の武運長久を願ったものと考えられている。本刺繡像は今年6月、山形市八日町の宝光院より授贈したものである。

（山形大学附属図書館所蔵・山形市指定文化財）

掛入石

米沢街道（現国道13号線）の上山市中山と川口の境にある巨岩（安山岩）。慶長5年（1600）年関ヶ原出羽合戦の際、撤退する直江軍（上杉勢）がこの窟に隠れ、最上勢から逃れたと伝えられている。

「窟に掛け入って隠れた」ので「掛入石」。また「隠れ石」と呼ぶ人もいるが、語源となった伝説は同じであろう。掛入石を境に中山から南は米沢領、川口から北は山形（最上）領であった。

関ヶ原出羽合戦当時、岩はタテ・ヨコ16m近い大きさで、窟には数十人も入ることができたというが、年月を経て明治29年の奥羽本線工事の際に割削され、今の姿となっている。

越後街道絵図

越後街道は越後の国（新潟県）と出羽の国（山形県）を結ぶ街道で、現在の国道113号とルートをほぼ同じくする。

兼続が実際にこの街道を使用して越後と行き来したかは不明であるが、越後方面には米沢藩特産の青芋などを運び、越後方面からは魚や塩が入ってきた重要な街道であり、古よりの越後と出羽の縁を偲ぶ絵図となっている。

（山形大学附属博物館所蔵）



御城下明細絵図

明和3年（1766）兼続の死後から140年余を経た米沢城下の屋敷割り図である。

慶長6年、越後からの移封当時の米沢は人口約6,000という小さな町であり、ほとんどの家臣は住む家にも不自由し、食べる物にも事欠く生活を強いられた。しかし、兼続の指揮のもとで力を合わせ、ようよう慶長14年（1609）に米沢城が完成した。

この絵図からは、入部当時二の丸までだった城に三の丸が作られ、家臣団への屋敷割りもなされ、城下町としての威容を誇っている当時の様子がよく伝わってくる。

（山形大学附属博物館所蔵）

もがみげざいじょうしよかちゅうまちわりず
最上家 在城 諸家中町割図

最上義光が行った大規模な改修工事後の城下絵図の写しである。筆写した原本は元和年間に作られたものとみられている。

上杉・伊達の両大名を意識し、町の南側（米沢方面）・東側（仙台方面）を中心に町を囲むように寺院を多く配置、いざ事が起きれば寺院の敷地が要塞の代用となるようにしている。

敵・味方に関わらず、義光にとって両大名の存在は警戒すべきものであったようだ。

（複製・印刷）



はせどう
長谷堂城 大手門扉

山形市の西南の小山に築かれた長谷堂城は、山の麓^{ふもと}を米沢・長井方面に向かう街道が通る交通の要の地であり、周囲には池・深田・空堀があり堅固な守りであった。

築城者・年代は不明であるが、慶長年間には最上氏（徳川方）の要衝として城主・志村伊豆守を始めとする最上軍の精鋭が配されていた。

慶長5年（1600）豊臣方の直江軍が長谷堂城を囲み、膠着状態が続く中、9月30日に関ヶ原での東軍（徳川方）勝利の報が届き、上杉景勝は兼統に早々の退却を命じた。

さて、ここからが兼統一世一代の見せ場の始まりである。最上軍を引きつけては鉄砲隊を仕掛けるなどの奇襲と（この時の鉄砲弾の跡が義光の兜に残っている）沈着冷静な作戦により、直江軍はほとんど無傷で米沢に引き返すのであった。この撤退は後の世まで語り継がれ、徳川家康に「あっぱれ汝は聞き及びし以上の武功の者」と言わしめるほどであった。

長谷堂城は最上改易とともに廃城となるが、城の門番を勤めていた者が大手門の扉を貰い下げ、家の囲炉裏^{いろり}上の梁につるして保管していたことから、虫食い等の被害にあうこともなく、400年後の現在まで残っていたのだった。

（山形大学附属博物館所蔵）